

連歌会には招かれていますが、ふるさと会津を訪れたのは、少し後の時代になつてからです。

文亀元年（一五〇一年）、五十歳になつた兼載は、いよいよ京都を離れて関東に移ることを決意します。旅であれば、やがてもどつてくることもありますが、今度はもどることのない移住を決意したのです。

若草の匂ひをうつせ花の蔭

の句の前書きをみると、子どもや家族を京都に残して、兼載ただひとり、関東に移り住むことにしたようです。

まず、北陸から関東に出て、福島県のいわきに住むようになりました。そこでしばらく月日を過ごして、兼載がふるさと会津へはいつたのは翌年の二月になつてからでした。

会津に帰つた兼載は、母の三十三回忌を行いました。